

1月20日（金）

おはようございます。

広告クリエイターの「殿村美樹」という人の話をしようと思います。NHKの放送に出ていて、話があまりにも面白かったので、いろいろなことを調べました。

広告クリエイターの仕事で有名なものは、彦根城の「ひこにゃん」をプロデュースしました。それから「佐世保ガーデン」も、また最近では香川県のうどんがよく売れているということで、「うどん県かがわ」を企画しました。

彼女の生い立ちは、お父さんに経済力がなくて、お父さんとお母さんの仲が悪く、彼女が小学校のときお母さんが家を出ていってしまいました。家を出て行くとき、彼女が大阪の子らしく「出ていかんといて」とお母さんにしがみついたら、「あんたなんかいらんと、ハイヒールで顔を蹴られたそうです。それが自分の悲劇のスタートだったと言っています。

お母さんが出ていったあと、だれも洗濯もしてくれないからいつも同じ服を着て学校に行っていたら、友だちから服が臭うとかなんとか言われていじめを受けた。家に帰ってもお父さんは頼りないし、学校ではいじめられるし、もう死のうかなあと思った。そんなとき学校の帰り道にある、家の近くの八百屋のお婆ちゃんが、「みきちゃんどうしたの」と言ってくれた。当時、だれも声をかけてくる人はいなかったから、声をかけてもらったことが嬉しくて、嬉しくて、泣けて、泣けて仕方なかった。そうしたら、そのお婆ちゃんが「みきちゃん、あんたいたいだけここにおってええよ」と言われた。そう言われて、家も地獄、学校も地獄やと思っていた生活が、その八百屋で過ごす時間だけは地獄ではなかった。ちょっと環境が変わり、視点がずれるだけで、見えてくるものがぜんぜんちがうということがわかった。

その後彼女は大学にめでたく進学をして、卒業後広告の仕事をした。大きな企業の宣伝などをどんどん行った。大きな会場で宣伝をね。ところがそんなときに阪神大震災が起こった。震災の避難所に行ったら、手伝うといっても何もできなかった。地方から来ている人や、自分が被災している人にもかかわらず、ボランティアをし続けてお役に立っている人たちを見て、自分がやってきたプロデューサーの仕事はなんの役に立っているのだろうと考えた。つまり、神戸を元気にしよう頑張っている人たちを見て、自分も地域を元気にするお手伝いをできたらいいなと思ってPRの会社を立ち上げたということです。

彦根城を売り出してくれと言われたのだけれども、彦根城そのものというより少し視点をずらして「ひこにゃん」はどうですかと提案した。佐世保の場合は「佐世保バーガー」が美味しいからと全国に売り出した。いま「桜エビ」を売り出そうとしていて、世界で桜エビを生で食べられるのは静岡のその地域だけだということに目をつけたという。

こんなふうには彼女は大活躍をしています。その彼女の原点は利他の気持ちです。利他の気持ちがあるからこそその仕事です。生い立ちにはつらいこともあった。八百屋のおばちゃんは今もう亡くなっているのだけれど、有名になった彼女がその家を訪ねたら、子どもさんが住んでいて、アルバムを見せてもらい、おばちゃんの写真が出てきて、彼女は号泣していました。そのひとが私を生かしてくれたと言って。

物事を為そうと思うのならやっぱりこういう利他の気持ちが大事だなあと思うのです。その気持ちがあればこそ物事は為っていくし、その気持ちがあればこそ自分を高めていくこともできますのです。私たちは自利利他と言っていますが、これはギブアンドテイクではありません。自利利他とは、自分を高めていくことによって多くの人のお役に立とうとすることです。多くの人のお役に立とうという利他の気持ちがあればこそ、そしてその気持ちが強ければ強いほど、自分を高めていくことが必要になります。それによってでしか利他は実現できないのですから。

そういうことですから諸君はしっかり自分を高めていってほしい。やがて利他を実現していく大きな武器になるのですから。また、絶望のなかでも、ちょっと視点をずらして見れば、見え方が変わり、生きる希望になったりするという、これは私にとってとても勉強になりました。

諸君たちにもこれからいろんなことがあるだろうけれども、多くの人のお役に立ちたいという利他の軸を忘れずに、腰を据えるべきところにきっちり腰を据えてやっていってほしいと思います。そうすれば必ず諸君らの活躍の場があるでしょう。

2008年にノーベル経済学賞を受けたポール・クルーグマンは、21世紀に役立つ人材はたった一種類、人の役に立とうと思っている人であると言いました。諸君らも自利利他の気概をもって頑張ってもらいたいと思います。

今朝の話はこれで終わります。

学校長